

これからの時代に求められること

——所長就任の挨拶に代えて——

禅研究所所長 岡 島 秀 隆

『禅研究所紀要』は禅仏教に関する専門的研究誌として古い伝統を持つ、全国的に見ても特筆すべき研究紀要です。その執筆刊行にご協力いただいております研究者諸氏の多くは、本学に在籍して禅、仏教、宗教の研究に取り組みつつ本学の大学および大学院教育に携わっておられる先生方です。それ以外に、毎年行われる本所主催の研究會・講演会でお話をお聞かせいただきました著名な先生方の玉稿を頂戴しておりますし、かつては心理学など禅の研究とは一見異分野の研究者の諸先生にもご投稿をいただいております。今後もできるだけ多方面の研究者の皆様にご寄稿をお願いして、充実した研究誌にしたいと存じます。思うに、禅仏教の研究方法は多様ですし、その関連分野もますます拡大してゆくのではないかと考えます。これまでの歴史学的文献学的アプローチにおいても、新しい発想のもとに比較思想史的研究や地理史的研究、地域関係史的研究など興味深い研究が期待できますし、思想哲学的研究の領域では、他の宗教との比較思想的研究や現代の諸課題に関する倫理的提言および福祉の分野などでの社会的人間学的貢献などが本格的に求められることにもなるでしょう。そうした現代社会の要請を肌で感じながら、禅仏教の研究は多角的に進んでゆくのではないよ

うか。むしろこうした現代社会からの視点を失くしてしまつたならば、禅仏教研究の存続の意味はないのではないかと思ひます。また、国際社会のただなかで、禅仏教の研究における原典原語主義が再認識されている面があります。つまり、日本の禅仏教研究には日本語を用い、中国禅仏教の研究は中国語で行うことを原則とするというのが今日の海外での研究動向のようです。さらに私自身の米国での経験なのですが、研究成果を公表するのなら国際社会の公用語である英語で発表しなければ無意味であると、親交のあつたフランス人研究者に言われたことがあります。これからの禅仏教の研究環境も、いろいろな意味で国際社会との接点を意識しなければならぬようです。このことは、日本禅宗の国際化の問題ともリンクした重要な問題だと思ひます。こうした状況からも今後の禅仏教研究には、柔軟な発想を持った若い優秀な研究者の発掘と教育が不可欠です。本紀要の内容がさらに充実して、国内外の若い研究者の目に留まり刺激を与えることができること、できうるならば、本紀要がそうした研究者の成果を公開できる場所となることを期待して、紀要の一層の質的向上を目指そうと思ひます。

大野榮人前所長の学長就任に伴う急遽の後任人事で、昨年度より愛知学院大学禅研究所所長の任を拝命することになりました。それでもこの一年間何とか体面を繕うことができましたのは、歴代所長並びに研究所の運営や活動にご尽力くださいました全ての皆様のお力添えによつて培われて来ましたが、確固たる礎があつたからと感謝いたしております。ここまで自分を棚上げして随分理想主義的なヴィジョンをお話ししてまいりました。元より浅学菲才の身ですが、本所に課せられた社会的使命の何たるかを初心に戻つて再考しつつ、紀要の刊行など多岐にわたる本所の諸活動を、現実的に少しでも促進するためにスタッフ一同全力を尽す所存です。関東、関西両文化圏の交叉点ともいえる中部地方の特色を活かしながら、禅仏教の研究と普及に努めてまいりますので、皆様のご協力ご鞭撻を切にお願い申し上げます。